

ちっぽいメ  
村



powered by

村長

## 第一章

---

「私が村長。村長です」

大切なことなので、二度、言った。村民ではなく、村長なのだ。大きさ、約1cm。未満。白い、楕円の、毛のかたまり。それが、村長だった。

ちっぽけ村の村民は、一人。村長なのだ。ちっぽけ村の広さは、横10cm。縦10cm。高さ2cm。そう、屋根付きなのだ。家ではない。小屋でもない。村長が村といえば、そこは村なのだ。村は、風で飛ぶ。

「自在なのです。あなたも、村民になりませんか」

品川の駅で、村長は、言った。雑踏を、よけながら。

「危ねえな。下見て歩けよ」

村長の怒声は、浅草あたりから、聞こえた。気が付くと、村ごと風で飛ばされていた。夕立のなか。響きは、しなかった。

山深い。山深い。ここは、北の田舎。

大きさ2.5m。彼は、ひっそりと、大木を根元から、へしおった。こっそりと、運ぶ。明日あたり、風が強くなる。そう思った。

村長の、はなちようちんが、割れた。

村の扉をあける。緑に囲まれていた。

「村の中には、こんな緑も、あるのです。誰か、村民になりませんか」

胆の底から、叫んだ。気持ちがいい。

見上げると、そこに、何かいた。

「村民希望の方ですね」

村長は、村の中から、紙切れを持ってきて、大きさ2.5mの足元に、おいた。

「村民第一号。君の名は、ムクリだ」

しばらくたって、ムクリは、ちっぽけ村と、村長と、村民票を、頭の上へのせた。

よっぽどうれしかったのか、村長は、おどりつかれ、ねむってしまった。

切り株の上に、そっと、おいた。

ムクリは、何の表情もなく、ただ、月を見た。

「ローマに通ず道は、ちっぽけ村に通ず」

村長は、ニューヨークにいた。

「誰だ。こんなわなを仕掛けたのは」

ガムである。村は動くことが、できない。だが、食料は、無限。おいしく焼けたホットドックが、近くにあるのだ。

肉汁が、あふれる。村長はかぶりついた。

不意に、体が浮いた。金髪の、男。

「Get the hell out of my face!!」

投げ捨てられた。

すでに満腹だったので、そのまま、村に帰った。

水深2km。ムクリは、およいでいた。表情はない。

太平洋。二頭のクジラも、一緒である。一週前の台風で、村長が巻き上げられてしまったのだ

。

ニューヨークは、雨にぬれていた。皆、かけ足だ。風も、少し強い。

「村を守ってこそ、村長だ」

水にぬれたガムは、かたまってしまい、村は、ますます、うごかない。

このままでは、村が、沈んでしまう。村長は、必死に村を動かそうとしていた。眠気覚ましのコーヒービーンズは、ずいぶん、上等なものだ。

「ここは、耐えるしかない」

村長は、村に、ひきこもった。

水かさは、増す。地を、水流が、つつみこむ。大雨だ。

カリフォルニアは、騒然となった。

ムクリである。

ここじゃない。

ニューヨークに伝説がうまれた。2mほどの毛が、街中にあらわれたのだ。大雨、強風で、人は、少なかった。

ある人は言う。これぐらいの大きな何かが、かげのように近づいてきて、気が付くと、いなくなっていたんだ。

男は、両手を大きくひろげ、TVのキャスターに言う。

ホットドック屋の、店主である。

「そろそろ雨が、あがったかな」

村の扉をあける。まぶしい。

緑に、囲まれていた。戻ってきている。

横に、ムクリがいた。

「おお、ムクリ。みやげだ」

村長は、小さな、コーヒーの豆を、かかえた。

朝のこもれ日が、二人をてらす。

「山の中にばかり、とじこもってはいけないぞ。ムクリ」

ムクリの頭の上で、村長は言った。

山を、おりていく。

畑が見えた。おそらく、スイカだ。

「よし、ムクリ。お前はここにいる。ここからは、村長の出番だ」

村長は、さっそうと飛び出した。

畑につくと、虫が多かった。おもむろに、アリの背に乗った。

「いけえ」

なかなか、進まない。しかたなく、歩き出した。

スイカ。頭から、つつこむ。割れ目。果肉まで、届いた。

「甘い」

思わず、村長は言った。どンドン、中へ、入っていく。進めば進むほど、甘くなっていく。

ふり返ると、さっきのアリたちも、スイカの中へ入ってきていた。

「おお、どンドン食べろ。遠慮することはないぞ」

村長は、じゃまになっていた種をアリへ渡した。アリたちは、それを、外へ運び出す。

夢中で食べていた。

村長は、前を見たまま、種を後ろへやった。アリたちがいない。外で、何やらさわぎが起きている。かまわず、中心部を一通り食べた。

「後は、勝手に食べるといい」

陽に当てられた村長の体は、桜色になっていた。

目の前に、こげ茶色の奴が、いた。アリたちが、戦っていた。甘い香りにつられてきた、カブトムシである。大きい。もはや、巨大である。

「こいつ。がいらいしゆか」

意味は、よく知らない。たぶん、大きいのだ。

アリたちの数は、百か五十。カブトムシは、かまわずに向かってくる。

「ふざけるな。これは、村民のものだ」

村長が、雄叫びをあげた。

「どいている」

かける。とんだ。巨大なツノに、たたき落とされた。

「おい、村長のじゃまをするな」

アリに向かって言った。

一度下がり、助走をつける。駆けた。アリの、増援。右から現れた一匹に頭から、ぶつかった。転んだ。

「ばかやろう」

アリたちが、カブトムシを囲む。それでも、歩をとめることはできない。

「ここで、退けば、村長の名がすたる」

近くにいたアリに向かって言った。その横に、さっきのスイカの種をみつけた。村長の目が、

光った。

「これでも、くらえ」

カブトムシに投げた。頭に当たる。

地鳴。カブトムシが怒った。

「いいだろう。ここからが、本当の勝負だ」

アリたちが、ふきとばされる。

「村民のかたきだ」

アリは、村民ではない。

思い直し、カブトムシの横についた。目を狙う。

跳躍。横から、またツノがきた。村長は、左腕と足をたたむようにして、それを受けた。地に、たたきつけられる。

スイカの汁で、ぬれていた村長の体に、砂がまとわりついた。

「よろいだ。ひきょうなどとは言うまいな」

進撃をやめないカブトムシに、ゆびを指す。

「三度目の、正直」

地を、かけた。ツノ。すべるようにして、かわす。

カブトムシのしたにもぐり込んだ。右腕を、ふり回す。つきあげた。カブトムシの体が、ほんのわずか、ういた。動きが、とまる。二度、三度、四度、頭でつきあげた。

カブトムシが、横転した。

村長の目にうつったのは、雲一つない青天だった。

「勝った」

アリたちが、カブトムシにむらがる。

「よせ、もう、勝負はついている」

体にはりついていた小さな石を、アリに投げた。

カブトムシが、羽をばたつかせた。村長の背中に当たった。

ふき飛ぶ。

目を覚ますと、山道近くだった。ふらつきながら、村長は森へ入っていく。

「おお、ムクリ。おっきなカブトムシと、戦ってな」

傷だらけの村長は、笑った。

「でも、勝ったぞ」

視界が、ゆれる。眠い。ムクリの足元まで歩き、腰をおろした。

そういえば、スイカも食べたぞ。ムクリ。お前が、畑にいけば、人間はびっくりしてしまうだろう。また、今度にしよう。

ムクリは、いびきをかき、何か言っている村長を、頭にのせた。

丘を一つ越えた、山の中。また、そこへ、帰っていく。

木々の間から、赤い光が見えた。夕日。ムクリは、スイカを見たことがない。

あんな感じか。

ムクリに、表情はない。だが、そう思った。